

令和 3 年度埼玉県障害者施策推進協議会  
第 3 回ワーキングチーム（A チーム）会議メモ

令和 4 年 1 月 1 1 日（火）14:00-16:00  
埼玉会館 3 A 会議室

参加者：佐藤委員（リーダー）、田中委員、八木井委員、田口委員、  
大井田委員、山中委員

他チーム参加者：なし

欠席者：小材委員

オブザーバー：西村氏

傍聴者：なし

1 ワーキングチームの検討課題について

（1）障害者への理解促進と差別解消

佐藤委員）

まずは「障害者への理解促進と差別解消」の部分で何か意見があればもらいたい。その後メインである、ヒューマンライブラリーについて入る。また、来月の第 3 回障害者施策推進協議会に向けてまとめに入っていきたいと思う。

では、「障害者への理解促進と差別解消」について、何か意見があればお願いしたい。

八木井委員）

やはり障害のある子とない子が子供の時から一緒に話し合ったり、一緒に何かをしたりすることが大事だと思う。

また、障害者差別解消法について考える点からも、「大人になってから」より「子供の時から」考えることが大事だと思う。

佐藤委員）

合理的配慮の提供が社会全体で行われるようになっている今日である。これからはさらに、子供を中心にどのように理解を進めていくかということが柱の「差別解消の推進」に繋がっていくかと思う。

#### 山中委員)

八木井委員と同じ考えで、価値観が確立する前である子供の時から障害者理解を進めることが大事だと思う。教育と福祉の連携である。

また、自分自身を振り返ることが、障害とは自分の問題にもなる可能性があるということを理解してもらうことに繋がる。このように、問題を内面化するにはどうすれば良いのだろうと考えている。

#### 佐藤委員)

障害のある人と関わったことがないからこそ理解し合えない、不安が生じてしまう。「既に価値観が確立している大人への理解促進」、「幼少期から多様な価値観を学ぶ機会を作る」という双方が重要になってくると思う。また、すぐ変わるものではないため、どのように促進していくべきか、どのような仕組みにしていけるべきかを考えていかなければならない。ヒューマンライブラリーにおいても、そのような部分が土台となっている。それ以外の施策の部分で意見はあるか。

では、一度ヒューマンライブラリーの話に進む。

### (2) ヒューマンライブラリー

#### ①ヒューマンライブラリー（仮称）の名称

#### 佐藤委員)

現段階で、ヒューマンライブラリー（仮称）の名称候補を6つ挙げてもらっている。

①ひとひと講座、②ひとひと対話講座、③障害を知ってもらい隊、④「障害ってなんだろう」や「障害って多様」ということが伝わる名称、⑤Diversity gallery（ダイバーシティ・ギャラリー）、⑥彩（いろどり）ライブラリー

他にも候補があれば教えていただきたい。また、今示されている名称候補に何か意見があればお願いしたい。

#### 田口委員)

⑤Diversity gallery（ダイバーシティ・ギャラリー）について、どういう意味なのか教えてほしい。

#### 事務局)

第2回ワーキングで提案された候補の中に「障害ってなんだろう」や「障害って多様」ということが伝わる名称が良いという意見があり、それらをキャッ

チフレーズのように使えるものはないだろうかと考えていた。ヒューマンライブラリーをそのまま使うことは難しいということだが、ヒューマンライブラリーはイメージしやすいという印象を持っているため、この形から少し変えた。まず、多様性は「Diversity（ダイバーシティ）」という意味。次に、「Gallery」の意味は2つある。1つは、「美術館」である。もう1つは、「観客」である。たくさんの人を呼んで、たくさんの人に多様性を知ってもらいたい、という思いを込めて提案した。

#### 田口委員)

説明を受けると理解できた。この言葉は浸透しているものだろうか？

#### 事務局)

浸透しているものではない。しかし、今後Webサイト等で、名称の由来や位置づけを紹介することになると思う。

また、ヒューマンライブラリーについても、横文字であり、最初はなかなかイメージできないという声もあったが、協議会やワーキングで委員の皆様が話し合ううちに定着していった。そのような形で、多くの人に何度も使用されるうちに定着するのではないかと考える。

#### 佐藤先生)

皆様が親しみや想いを持てる名称が良いと考える。ヒューマンライブラリーについては、ライブラリーがつくことによって、「図書館」というイメージが先行するため、そのような意味付けで良いのか？ということもある。また、名称は、ヒューマンライブラリー（仮称）の内容をどのようにしていくかにも関わってくる。これから枠組み、内容を考えながら、最終的にワーキングでの名称案を決められたらと思う。

今回は資料3として、私と事務局のやりとりのものを用意した。資料4として、八木井委員からも資料を用意していただいた。

まずは事務局から、資料1の名称以降の部分を説明してもらおう。

## (2) ヒューマンライブラリー

### ②ヒューマンライブラリーのスキーム

#### 事務局)

##### 資料 1

#### 2 ヒューマンライブラリーのスキームについて

##### (1) 埼玉県内の類似事業の現状

###### ・地域福祉推進プラットフォームの構築

→県社協、市社協、福祉施設、学校関係者などが多様な福祉教育の実践を学び合う。地域の住民を含めた多様なパートナーとの連携共同体制を構築する。実際にセミナー「地域の共生社会のための福祉教育実践プログラムを作ろう」に参加し、福祉教育におけるアプローチ法や取り入れたほうがいいものなどの情報を提供してもらった。県社協からは、ヒューマンライブラリー（仮称）の取組をこのプラットフォームに取り入れていきたいとの声をいただいている。

###### ・市町村社会福祉協議会

###### 資料 1 のとおり

市町村社協では、学校から福祉教育の依頼を受けたときは、講師を探して調整するなどのマネジメント部分も実施している。

###### ・当事者理解講座

###### 資料 1 のとおり

##### (2) 埼玉県内小中学校の令和 3 年度「総合的な学習の時間」の実施状況

教育局、社協、障害者福祉推進課で打合せをし、教育局から総合的な学習の時間について、データを提供していただいた。(資料 1 のとおり)

データより、小学校では 4 年生、5 年生時に取り組むところが多い。

中学校では、小学校で福祉について実施していたという情報が伝わると、中学校で実施しないことになってしまうなどのケースもあるため、そうならないように繋げていくことが大事と考える。小学校に合わせた講座、中学校に合わせた講座などで、ステージを分けたものを設ける等の工夫が必要だと思う。

～（３）障害者への理解促進と差別解消に向けた運用の説明～

※パワーポイント配布資料と併せて説明

佐藤先生から頂いた宿題について、お答えする。

①ＤＥＴ埼玉と県の出前講座の年間の実施件数、依頼先の内訳、これらの取り組みに関する調整等における具体的な課題について

【ＤＥＴ埼玉】

令和元年度 ２９件（小中学校７件、一般２２件）

令和２年度 １４件（小中学校５件、一般９件）

令和３年度 ３４件（小中学校１５件、一般１９件）

※令和３年度１２月末現在

具体的課題

- １．車いすユーザーが伺う場合の、トイレ、スロープ等のバリアフリー状況
- ２．車いすユーザーの駐車スペースの確保
- ３．重度障害者（電動車椅子ユーザー）の移動の確保、タクシー代の負担大

【埼玉県】

障害福祉担当→障害者の手帳制度について

令和元年度 ４回（小学校事務１回、保護者１回、警察官２回）

令和２年度 ２回（警察官２回）

令和３年度 ２回（警察官２回）

※令和３年度１２月末現在

総務・企画・団体担当→障害者差別解消法、共生社会づくり条例のポイントについて

令和元年度 ５回（障害者団体１回、警察官４回）

令和２年度 ２回（警察官２回）

令和３年度 １６回（障害者団体２回、警察官１４回）

※令和３年度１２月末現在

調整に関して問題はない。

課題は、新規ユーザーからの依頼がなかなか増えないこと。しかし、警察官

向けの研修は好評であり、多くの依頼をいただいている。

②クリエイターチームで「障害特性に共通する事項」とありますが、担当課として具体的にどのように捉えているかお示しいただきたいと思います。

どの障害特性を持っている方でも、共通事項の話として、「障害とは何か、障害はどこにあるのか」などを話してもらいたい。障害者差別、合理的配慮の提供、環境の整備の事例をロールプレイングやグループワークなどにより、考え方を伝えていただけると良いと考えている。また、これは受講する年代によって変わるものであると思う。心のバリアフリーの観点から「社会や環境の中にあるバリアとは何か？」

や「ヘルプマーク、ケアラーを知っているか？」なども挙げられる。

中高生・大人向けであれば、共生社会を実現するために自分自身ができる、具体的な社会を変える行動の理解と形成など。双方向の話合いによって、自分で発見をしてもらえると、心に残る印象的な場になると考えている。

今後も皆様の御意見をいただきながら、コンテンツ作りをしていきたい。

佐藤先生)

ここから委員の皆様の意見を取り入れて上書きをしていけたらと思う。

次に八木井委員の資料について、ご説明いただく。

八木井委員)

～資料4の説明～

佐藤先生)

事務局の話、八木井委員の御意見を踏まえ、何か意見があれば出していただきたい。

田口委員)

福祉授業について、どのくらいの時間を取っているものなのか？障害の範囲は広いため、バランスはどのようなになっているのかなどが気になった。

事務局)

総合的な学習の時間は、学校によって取り方がまちまちである。

例えば、小学校4年生で福祉の勉強をすると決まったとき、年間のカリキュラムとしてパッケージで紹介したいと考えている。例えば、学校から年間で5

回の時間割をもらえるのであれば、5つの障害特性について講義してもらうなど。

#### 佐藤先生)

・総合的な学習の時間は、学校の中で、いろいろな授業と重ねて広げている学校や他の教科と関連付けて設けている学校など様々である。また、特別活動という時間枠で取り組んでいるところもある。これらは前年度の段階で既に決まっている。その後、学校の先生は、どのような形で行うかなどを考える。そのため、先ほど事務局からあったように、パッケージ売りをした方が乗りやすい。

・ただそれだけでは、価値観を理解することや本質的な障害理解に繋がらないため、しっかりと調整をしていくことが大事である。「どうしてこのようなコンテンツになっているのか」ということなどを教員へ周知啓発をしていかなければならない。「質を深めていくこと」と「ツールを上手に機能し、周知すること」が大事である。

・八木井委員が先ほどおっしゃっていたように、それぞれのプロセスによっては、既存のもので上手に回っている部分は生かしていくことも考えられる。

・学校サイドが福祉教育をどう捉えているか？こちらがどのように提案していくか？を委員の皆様と確認していかなければならない。

・イメージ5にあるが、受講対象によって回数や時間が変わっていく。高等学校であれば、福祉学習などに特に力を入れているようなところもある。例えば、筑波大学附属坂戸高校では、地域とタイアップして実施している。県社協の地域福祉推進プラットフォームでは、学校や施設と地域を基盤とする福祉教育を展開していけるようにするというものもある。このような県内の蓄積、実績を上手に生かしていくことも必要。

・事務局からは、ここで人材育成をして差別化をはかる話があった。そのためには、クリエイターチームを充実させ、人材育成することを柱の1つにしていかなければならない。ヒューマンライブラリー（仮称）の運営をするうえで人材育成として立っていただける人を改めて要請することが重要な側面となってくる。

これまでの話から、田口委員はいかがか。

#### 田口委員)

パッケージ化して提供するという話で、だいたいわかった。

**佐藤委員)**

- ・現段階では、マネジメントする人がいない。講師は自分でマネジメントできる人、頼む人もある程度見通しを立てられるような人でなければならない。
- ・市社協では、双方のニーズを聞いて、マッチングする存在であるボランティアコーディネーターや福祉教育担当者がある。ヒューマンライブラリー（仮称）では、双方でやり取りをすることになると、負担が大きくなることが課題。
- ・既に上手に運営しているものでは、調整役として社協や任意団体が実施している。クリエイターチームなどで対応することになるのであれば、どのように機能させていくのか？委員の皆様の尽力がどこまで必要なのか？等で相当変わっていくと思う。
- ・今までは「健常者」がこのような障害理解の場を設けていたところ多かったが、このヒューマンライブラリー（仮称）では「障害のある方」が発信しているという点が差別化をはかれるところである。そのため、障害当事者からの発信でないと意味がない。障害当事者の方がクリエイトの部分を考えていくべきである。
- ・八木井委員がおっしゃっていたように、専門的に研究している人や、既に先行して研修プログラムを作ってきた日本福祉教育ボランティア団体の理事クラスの人を協力者として生かしていくことも可能性として1つある。ここで大事なことは、障害当事者が主体的に動いているということである。「ツールを利用して広めていくこと」「障害当事者が作ったものであること」が差別化の要素である。
- ・「(医学モデルから社会モデルに変わり) 環境に配慮されれば、生活がより豊かになること」「障害の特性によって異なる・多様であること」をどのように理解してもらうのかというコンテンツ作り。
- ・これらを具体化していくことがこのワーキングでの役割の1つである。皆様として、押さえておきたいところなど気になる点があれば教えていただきたい。
- ・八木井委員からの意見では、前年度の協議会・ワーキングの中では、講師養成は当事者団体の中ですするという意向があったという理解で良いか？ここも精査していくということだと思うが、私もそう思う。様々な障害の立場の方がいる。車いすの方でも、先天性の方やいずれ治る方。聴覚障害を持っている方でも、生まれつきの方や中途失聴の方。視覚障害を持っている方でも、全く見えない方や光を感じる・少し見えるなどの方。「障害のある人＝何もできない人」という考えを持っている人もいるため、そのような点を洗い出していくこ



とも必要である。

- ・当事者がいないプログラムによっては、差別・偏見を助長してしまうようなものもある。県社協も、当事者と一緒にプログラムを作ることを奨励するようになった。市社協が学校との調整役として入り、発信していくというスタイルも上手に生かすと良いと思う。

- ・八木井委員が示してくれたように、講師の養成について障害者団体の方から御意向を聞いて、障害理解の部分において、力を借りながらやっていく。また、県社協とも協力する。

- ・私は資料４の「④福祉教育の見直し、実践」を学校に依頼することは現実的ではないと思っている。しかし、社協・県教育委員会の力を借り、働きかけをすることは意味があると思う。

事務局で作成していただいたスキームをベースにして、大事にする部分などの意見を出していきたい。山中委員がおっしゃっていた「価値」の部分についてなど・・・山中委員としては、そのあたり反映できそうなどの意見はあるか？

#### 山中委員)

必須事項で障害理解を入れることについて、すごく大事だと思う。しかし、障害とは数限りないものである。障害理解は自分自身を振り返って、理解することだと考えている。１つの障害について、自分自身の振り返りがしっかりできれば、他の知らない障害に出会ったときも応用がきくと思う。まず、自分自身、自分の価値観を知るというコンテンツを最初に入れるのはどうか。様々な障害特性の理解に応用がきく障害理解のコンテンツを取り入れられたら良いと思う。「他者を知って自分を深める」が大事だと思う。

#### 佐藤委員)

障害理解を進めていくうえでのプログラムを精査して、提供できるようにすることの重要性も含まれていると思う。

大井田委員はいかがか。

#### 大井田委員)

私は川口市内の小学校で、盲導犬の使用者の話を聞きたいということで依頼をいただいている。しかし、そのように限定されてしまうと・・・と思っている。全盲は１～２割で、残り８割は弱視の人が多い。見え方は人それぞれなので、視覚障害者を一括りにはできない。盲導犬ユーザーの話だけではなくて、

いろんな見えづらさを抱えている人は、それらを補うために様々な工夫をすることで、ほとんど普通の人と変わらない生活をしているということを理解してもらえるような伝え方が必要と思う。また、ずっと話を聞くだけでは飽きてしまうので、サウンドテーブルテニスをするというものも取り入れている。1コマだけで依頼されたときは、2コマでの提案をすることもある。

佐藤先生)

そのように、依頼されたものだけに応じるのではなく、当事者側から提案し、意図を説明していくことはとても大事だと思う。

田中委員はいかがか。

田中委員)

これを推進する体制について気になった。

本会議3回、ワーキング3回の中で、ヒューマンライブラリー（仮称）を推進していくための人と時間が足りるのか。総務・企画・団体担当の中で、ヒューマンライブラリー（仮称）の事務担当を置かないと、推進していくことはなかなか難しいのではないか。また、次はワーキングのメンバーも変わり、1から考え始めることになる部分も出てくるかと思う。資料2のイメージ10までどのように進めていくのか、気になっている点である。

佐藤先生)

私も同じように気になっている。

このワーキングでは課題や意見を出してもらい、蓄積したものを次のワーキングに引き継いでいきたいと思っている。また、メンバーでなくても話合いに参加することはできる。協議会全体の力を借りて進めていければと思う。

今、田中委員から頂いた意見については実務において大きな課題の部分であると思う。

田口委員はいかがか。

田口委員)

講演等は今までしたことがないが、もし自分がするとしたら、まずは「障害とは何か」から入ると思う。そして、様々な障害について整理したうえで自分の立場・障害を明確にして話し、障害理解について知ってもらいたいと考える。

佐藤先生)

これは山中委員もおっしゃっていたように、「障害」の前に人間としての「自分」というものがあることを知ってもらふ、ということであると思う。「障害」の何を理解してもらふのかを整理していく必要がある。  
八木井委員はいかがか。

八木井委員)

言葉の障害があるため、伝えていくということの難しさがあり、そこをどのように乗り越えるのかが課題だと思う。

佐藤先生)

実際に、そのような障害のある人と出会う機会がないため、その課題から学ぶということができると思う。学習の時間には制限などもあるため、サポートの人たちをお願いすることで適宜連絡を取り合うこともできると思う。

八木井委員)

前回も意見として出したが、サポートの人と一緒に活動をするということになると思う。そのような形でスキルを上げていく。

佐藤先生)

それでは時間が迫ってきたため、名称案について戻りたいと思う。  
この候補の中でどれが良いなどの意見はあるか。

山中委員)

⑤Diversity galleryについては、違和感がある。ギャラリーは「当事者」という意味を持たない。人はみんな障害当事者になる可能性がある。  
「Diversity」も初めて聞いたときは何のことかわからなかった。また、⑥彩ライブラリーのような口当たりの良い言葉よりも、しっかりとした日本語で、目的が相手に伝わるような言葉、小学生でもわかるような言葉が良いと思う。  
前回出した、ひとひと対話が一番わかりやすいのではと思う。

八木井委員)

私も同じように「対話」を入れたほうが良いと思う。

**大井田委員)**

新しい候補として、障害を理解する、という言葉をあえて使わず、「もっとあなたを知るライブラリー」という優しい言葉を使った名称が良いと思う。

**田口委員)**

ひとひと対話も柔らかくて温かみがあって良いと思う。

大井田委員の提案も、サブなどで入れると、膨らみのある名称になるのではと思った。

**田中委員)**

「もっとあなたを知るライブラリー」、すてきだと思う。

障害を理解するということがわかる名称が良いと思う。ひとひと対話講座などだと、どんな講座なのだろうと思ってしまう。障害理解が目的であれば、それがわかる名称が良い。サブテーマをつけても良いと思う。「もっとあなたを知るライブラリー～障害ってなんだろう～、～障害を知る～」など。

ヒューマンライブラリーもだが、ひとひと講座、対話講座もわかりにくい。もう少し肉付けをしたような表現にしないとインパクトがないのではと思う。

私は今ここで決める必要はないと思う。今後、新たな発見等もあると思う。

**佐藤先生)**

ひとひと対話講座

もっとあなたを知るライブラリー

「障害理解」がわかるようなものを付け加える

という提案があった。

あえて「障害」というものを入れないという意見もあったため、どうするか。また、名称のため、あまり長いと使いにくくなることの整理も必要。

田中委員がおっしゃったように、皆さんが気持ちを持って使える名称が良いと思う。

**【(2) ②ヒューマンライブラリー（仮称）のスキームのまとめ】**

障害理解、障害とは何かを知ってもらう・伝える

→自分自身と繋いでいく、という視点が必要

プログラムをどのように作っていくか

コンテンツをどのように工夫していく必要があるのか

コーディネーターや人材育成が必要であること

推進体制を3か年どうしていくか整理していくこと  
→イメージ10までを実効性のあるものにしていく必要があること  
名称については次年度に持ち越し

事務局)

第3回障害者施策推進協議会は2月18日(金)10時から、県民健康センター大会議室Cで開催する。

第3回でまとめを報告していただくことになるが、ヒューマンライブラリー(仮称)についてはどのようにまとめるのか?

佐藤先生)

大柱Ⅰ「理解を深め、権利を護る」を進めていくうえで、特にヒューマンライブラリー(仮称)を3か年で実用していけるようにする。これが「理解促進と差別解消」の象徴とするものである。

先ほど挙げた、確認できたところを次年度ワーキングでより精査してもらい、プレ体験のようなものも行いながら進めていく。その中で実際の相互理解に関連する課題があれば確認していくことが必要になる。

事務局)

他チームの委員の方のためにも、本日の資料は第3回で配っても良いのか?

佐藤先生)

資料1、2を配っていただきたい。資料1については、本日説明いただいたDET埼玉や県の出前講座の実績等を追記してもらいたい。DET埼玉の実績から、企業なども合理的配慮の提供に向けて動いていることがわかる。このヒューマンライブラリー(仮称)では、県としては子供たちに視点を当てているが、一般の人たちに向けたものとしてDET埼玉の実績が生かせる可能性がある。

資料1、2をワーキングの1つの成果として示していただき、次年度ワーキングのメンバーにも知ってもらっておいた方がよい。私の方からもワーキングの報告として第3回協議会で説明をする。

田中委員)

できれば全委員の共通理解として知ってもらい、そこからいろんな御意見をいただいた方がよい。様々な軌道修正をし、より豊かになれば良いと思う。

**佐藤先生)**

当事者発信をきっちりすることが大切だと思っている。既存のものを生かし、既に経験のある方々の協力を得ながら、当事者発信をするコンテンツを作れたら良い。

**田中委員)**

個人的には、最初は小中学校を対象に初めていくのが良いと思う。大人になる前段階で理解を深めることは大事だと思う。あまり広げていくと、ターゲットがおおざっぱになってしまう気がするため、絞った方が良いと感じた。

**佐藤先生)**

当初、事務局も小中学校から対象としていたので、その方向性だと思う。ただ、学校では、親世代から理解のない声が出るなどの問題点もあるため、双方に必要という面もある。まずは、走り出しとして、義務教育課程の小中学校を対象にしていくということでまとめる。もちろん、長いスパンでは社会全体に対して、ということ考えている。

**事務局)**

では、これで本日のワーキングを終わりにする。